

六本にて、能くかきたて、泡たちたるを、鉢に入れて、蒸籠に入れてむすべし

酢の物の酢の拵方

三盃酢は酢一盃と酒一盃と醬油一盃とを合せてつ

くるべし (酒の所を味淋の煮切を用ひてよし)

合せ酢は、味淋の煮切と酢とを合せて用ふ

煮かへして用ふるを、煮かへしずといふ、

砂糖の煮とかしたると酢と合せたるを甘酢とい

ふ、正しくはみりん煮切を酢と合するをいふなり

いそがしいのでおかしき申せんでした、

いろは料理はこれにて一寸をはりといはしま

して、つぎはなにかやさしいのを、いろはよ

りは、すこしうまく料理うつもりです

何が御馳走にできますか來年の御たのしみに申

さすにねます、其おつもりでおまち下さい



兒童心理

文學士 松本孝次郎

恐怖 (或は恐懼)

此の恐怖の情は幼兒の未だ幼い時から起るものであるが、其重なる原因は一遺傳、二無知識、三虛

弱、四經驗である。

一、遺傳が恐怖の原因になるといふことは眞の説明のつかぬ場合が多い。例へば鶏の雛が初めて鷹を見た時から己に之を怖れる。又墓が蛇に逢へば初めから之を怖れる。これは著しい遺傳と稱す

べきものであるが。人間の場合になると一寸分り難いのである。他の場合で説明の出来ないのを遺傳であるといつて居る。例へば幼児か馬を見て怖れる。犬を見て怖れるなどはこれである。大人でも他の三の原因によらずして非常に猫を恐れ、鼠を恐れ又蝶を恐るゝものがある、

二、無知識から起る恐怖、これは度々あることである。かの幼児が海岸に出て向ふの方に大きな波の立つのを見て怖れ、又大砲の響を聞いてこわがること、又田舎者が新橋の停車場に着て、凡て其邊の事を知らざるがために何れの方に進み行きて可なるやを知らず、何れに向つても叱責せらるゝ心地して怖るゝこと、などは皆無知識から起る恐怖である。又かの幼児が暗い處を恐れるなども此の原因によるのである。即ち只暗いばかりで、そ

こに何も怖い物かないといふ事が分らぬのである故に此場合には或人々がする様に「暗い處にも何も怖いものはない、どんく行け」という様に仕向けるのは誤りである。明るくして何も怖いものないといふことを知らすべきである。即ち知識を興へるのが適當である。かの化物の話をして幼児を怖からすのは幼児の無智識に乗してするごとくで教育の原則に背いて居る。

三、虚弱、身軀の虚弱な人は一体に怖かり易い一寸咳か出ると、もう肺病になりはせんかと恐れ腹か痛めは胃病ではないかと恐れ、傳染病者に近づけば傳染せぬかと恐れる。其他皆斯様なもので虚弱な人は一般に恐怖の念が強い。加之神經が過敏であるから、少しの刺激に對して、烈しく恐怖の情を起すのである。學校の試験に於て、虚弱

の生徒の脈搏の數か恐怖の情のために急に變ずることは往々見ることである。

四、經驗から起る恐怖、これは自分が曾て自ら經驗して害を受けた爲に怖かるのである。故にこれには恐れる理山がある。教育上からいへば第三までの原因に由つて起る恐怖はなくして第四の經驗から來る恐怖は保存して置いた方がよいのである。只過度に恐怖せぬ様に原因に比例して恐怖する様にしたいのである。世間には何でも幼兒を怖からせない様に憶病にせぬ爲に何物も怖からぬ様に教育する人があるが、これは大なる誤である。恐るべきことは恐れさせるといふことは必要なことである。そうでないと、幼兒は非常に粗暴になる。軍人の子弟には屢々非常に粗暴なものがあるが、これは幼い時から何も怖からせぬ様に教育し

た結果である。又反對に日本では從來父親といふものは非常に怖からせてあるが、これも又適度を失して居る。而して恐怖の情が適當の度を失へば二つの極端となる。一方は何んでも怖がる、即ち憶病となる、これを直すのには智識を與へるのによろしい、而して他の方の極端は粗暴となる。これには、粗暴は非常の不利である。眞に害を受けることがあるといふことを言ひ聞かせるのである。親でも教師でも幼兒を畏がして幼兒を服従するものがあるが、これは一時其功を奏することがあつても、適當の方法ではない。何故なれば幼兒は畏かす人に對して同情を持つことが出來ぬから同しく服従しても喜んで従ふのでないから、眞の服従でない、加之畏かすために幼兒の心体を疲勞させて、大に勢力を害するものである。故に同

情をもつて親切に誘導しなければならぬ。

奇妙な動植物(ついで)

田寺寛二

前號に於きましては生存競争といふ事を極手短かにお話ししましたが、斯う云ひますと世の中は實に悲雲慘膽たるもので、命が縮まる様な氣がしますが、左様ばかりでもありません、又互に扶けあひ、共に一致團結して相親むといふ温かな潮流も流れて居るのであります。

此温かな潮流と云ふのは、所謂共同生活とか共生とか云ふものでありまして、全く種類が違つて居る動物(植物にも共生といふのがありますがそれは植物のお話をする時に述べませう)が、共に生活を営みまして、お互に繁榮を謀るのであります。

前號で已にお約束申しました通り、此度は昆虫のお話をする筈なのですから、此共生といふ事も昆虫の中から材料を探りませう。(「からす貝」と「たなご魚」との共生なども随分面白いですから、御研究になるのもいゝでせう)

茲でお話しやうと思ふのは、蟻と野虫との共生であります。この蟻はクマアリと申しまして、野虫はミドリアブラムシといふのであります。

此二つが何んな方法で共生するかと申しますとクマアリは常にミドリアブラムシが棲んで居る近くの枝を往復します。アブラムシといふのは植物の嫩葉を食ふ害虫であります、蟻は樹枝を往復してをるとき、此野虫を害するテントウムシとかクサカゲロウ(何れも幼虫のときから盛に野虫を捕食するものです)を追つて、まことに大切に保